令和７年度学校評価表

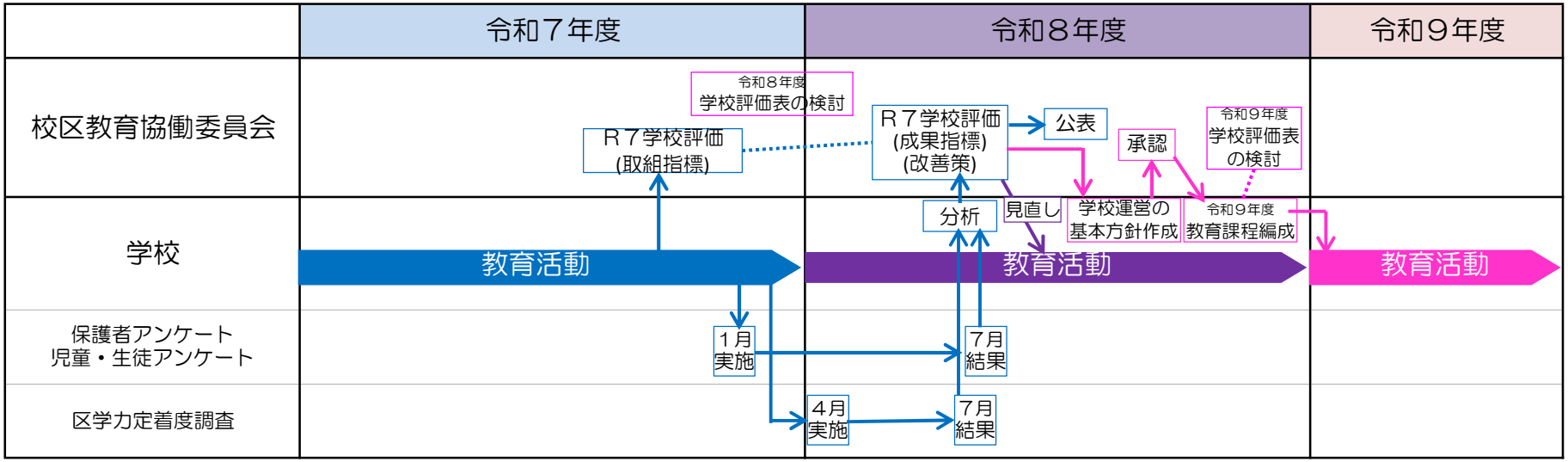
品川区立宮前小学校	校長	三浦	一輝
宮前小学校校区教育協働委員会	委員長	西谷	尚徳

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

(1) 学力に関すること。
(2) 人間性や社会性に関すること。
(3) 体力・健康に関すること。
(4) いじめ防止の取組に関すること。
(5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標	・基礎・基本の時間の活用やiPadを効果的に活用し、学力の定着を図る。 ・算数は2年生以上で習熟度別学習を効果的に実施し、基礎的な学力を定着させるとともに、発展的な学習も行う。 ・児童が学び方を選択し、互いに学び合う場面を設定し、主体的に学習に取り組む態度を育成する。 ・読書活動を充実し、文字への関心を高めるとともに、思考力等を育成する。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	区学力定着度調査では全ての教科の平均正答率が区の目標値を上回る。	2～6学年で17教科のうち、9教科で目標値を上回った。 （目標値を5ポイント以上上回った教科2、下回った教科0）	B	（課題▲、改善策◎） 国語▲漢字を書くこと、文章を書くこと ◎書くことの習慣化、読書量の向上 社会▲グラフや資料の読み取り ◎複数資料を読み取る活動の継続 算数▲基礎的な計算力 ◎既習計算問題の反復練習 理科▲自然現象と学習事項の関連付け ◎日常生活の現象と既習事項を結び付けられるような声掛け
	算数の習熟度別授業及び各学年のことのはノートの繰り返し学習の目的の明確化とともに、未来塾は、各学年20回実施する。	年間を通して、単元ごとに児童の理解度等に応じた3展開での指導を実施した。指導方法や内容は学年で共通理解しながら進めた。未来塾は、各学年、年間20日実施した。	A	
	週3回の朝の基礎基本の時間は、国語と算数の漢字や計算の繰り返しや振り返りを行う時間として、計画的に実施する。	週3回の朝の学習は、基礎基本の繰り返し学習として、継続的に実施した。iPadのアプリ等も活用し、自主的に学習する機会を設定するなど、学び方の定着にも寄与した。	A	
②	「授業での話し合い」等の学び方に関し、「i-Check」での肯定的な評価を80%以上とする。	「グループで話し合う授業は楽しいですか」という質問項目に対して、肯定的な回答が84％であった。	A	話し合い活動への肯定的評価は84%と高く、UDLの視点を踏まえた学び方の選択やタブレット活用が全学年で進み、主体的な学びが広がった。考えの共有や合意形成、相互評価の場も効果的に機能し、学び合いの質が向上している。今後は、学び方の選択場面をさらに充実させ、児童が目的に応じて最適な学び方を選べる力を育むとともに、話し合い活動とICT活用の質的向上を図り、学びの深まりにつなげていく。
	UDLを踏まえ、学び方の選択を年間3回以上の授業で導入するとともに、全ての授業でタブレットを効果的に活用する。	校内研究のテーマであるUDLについては、年3回の自己申告の授業だけでなく、4回の研究授業や3回の若手授業研究でも行った。全学年でタブレット等の活用の工夫が見られた。	A	
	学習において、学び合い活動を計画的に行い、児童が相互評価を通して、自他の良さに気付くことができる機会を設定する。	UDLと関連させることで、常に、考えを共有したり、合意形成を図ったりする活動を全学年で行った。相互評価の場としても、効果的な学習活動となり、考えの広がりが見られた。	A	
③	児童１人あたり貸し出し冊数（1ヶ月）の平均を4冊以上にする。	年間の全体貸出冊数は13,518冊となり、児童１人当たりの貸出冊数（1ヶ月）は4.4冊であった。	B	１人当たりの1ヶ月の貸出冊数は4冊以上を達成した。令和6年度に比べて微増であった。図書委員会やスタッフによる取組を計画的に進めることで、読書をする機会の拡大を図ることができた。引き続き、授業との連携等の啓発を続けていく。
	読み聞かせや読書月間等を計画的に実施するとともに、スタッフと連携し、本の紹介や展示の工夫等の取組を毎学期実施する。	図書委員会を中心としたイベントを年3回、読み聞かせを年9回実施した。図書館スタッフとの調整を定期的に行い、本の紹介や展示の工夫改善を年間を通して実施した。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標	・市民科を中心に、心の教育に焦点をあてた授業の充実を図る。 ・挨拶運動や日常の生活指導で、挨拶や礼儀、丁寧な言葉遣いの定着を図る。 ・特別活動やボランティア活動等を通して、目的意識をもち、他者との協働の大切さを理解できるようにする。

評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	児童の公共ルール・マナーに関し、「i-Check」での肯定的な評価を80%以上とする。	「学校やクラスのきまりを守っていますか」などの質問項目に対して、肯定的な回答が88%であった。	A	公共ルールやマナーに関する肯定的評価は88%と高く、事前指導と事後指導の振り返りを全学年で徹底したことで、場に応じた適切な行動が定着してきた。市民科では地域講師を招いた体験的な学習を計画的に行い、礼儀やマナーへの意識を高める機会となった。今後は、家庭との連携をさらに強め、学校内外での望ましい行動を継続して身に付けられるよう、指導の一層の充実を図る。
	校外学習、地域行事で場に応じた行動がとれるよう、目的等の事前指導を徹底するとともに、事後に振り返る場を設定する。	全学年で道路の歩き方や電車乗車時のマナー、学習中のルール等を事前に指導し、児童の適切な行動につなげた。事後の振り返りを確実に行い、改めて気付く機会とした。	A	
	市民科の授業において、礼儀やマナーに関する体験学習を全学年で実施する。	地域等から講師を招いた授業を計画的に行った。茶道教室等、市民科において、礼儀やマナーを学ぶ機会を設定し、児童の意識を高めた。家庭との連携は継続する必要がある。	A	
②	児童の挨拶・言葉遣いに関し、「保護者アンケート調査」での肯定的な評価を80%以上とする。	学校公開アンケートにおいて、授業の挨拶や来校者への挨拶、前向きな言葉に関する肯定的な評価は87%であった。	A	学校としての挨拶指導とともに、代表委員会によるあいさつ運動週間の実施により、校内でのあいさつが日常的に見られるようになった。しかし、2学期は、全体的にあいさつが少なくなった時期が見られた。行事の準備等の中で、意識が低くなったことも考えられ、あらためて、指導の継続とともに、教員自らがあいさつを率先して行い、手本となる姿を示していくことを重視していく。引き続き、伝統的な取組として大切にしていく。
	校内での挨拶指導を日常的に行うとともに、教員だけでなく、来校者にも積極的に挨拶する指導を積み重ねる。	挨拶は教員全体で確認し、全学年で指導を行い、教員自らも率先して実施した。日常的な指導を積み重ね、高学年を中心に、来校者への挨拶や廊下歩行の際の挨拶ができている。	B	
	代表委員会によるあいさつ運動や地域清掃、縦割班活動等において、校外でのあいさつ運動を計画的に実施する。	代表委員会が中心となってあいさつ運動を企画するなど、児童の意識の高まりにつながった。地域清掃等では、ボランティアの方への挨拶やお礼を欠かさないよう指導した。	A	
③	勤労・ボランティア活動に関する「i-Check」での肯定的な評価を80%以上とする。	5.6年生の「お祭りやボランティア活動など、地域の行事に参加していますか」という質問項目に対して、肯定的な回答が77%であった。	B	地域行事への参加は77%であり、係や当番、委員会活動で目的や協力の仕方を事前に考える機会を設け、主体的な関わりを促した。活動後の振り返りも行い、目的意識を高めた。今後は地域との連携を深め、勤労・奉仕活動への参加をさらに促していく。
	係や当番、地域清掃、委員会活動等において、全学年で事前に目的や他者との関わりを考える機会を設定する。	係や当番、委員会等では、活動の目的や内容とともに協力の仕方等について、各担任や担当教員が考える機会を設定した。特に、目的については常に確認するよう心掛けた。	B	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標	・児童の運動意欲及び体力の向上を図る。 ・児童の運動習慣の定着及び健康な生活の重要性の理解を図る。 ・家庭と協力し、児童の健康増進を図る。		
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	体力テストの結果が昨年度までの記録や都平均と比較して上回る。	全国平均比で、「上体起こし」が高い。「握力」「長座体前屈」「反復横跳び」が低い。	B	体力テストでは都平均を上回り、全国比でも上体起こしが高い一方、握力・長座体前屈・反復横跳びに課題が見られた。今後はスポーツトライアルやワンミニッツエクササイズを学年に応じて工夫し、体育委員会を中心に計画的に実施する。さらにボール運動の授業改善や投げ方教室、ハンドボール・Tボールの導入、縄跳び・マラソン習慣の継続など、学校全体で目標をもった取組を充実させ、基礎的体力の底上げを図る。
	スポーツトライアル、ワンミニッツエクササイズについて、学年に応じて目標や種目等を工夫して取り組む。	スポーツトライアルやワンミニッツエクササイズは、体育委員会を中心として計画し、学年に応じた方法等を考え、集会等の機会を活用して実施した。	B	
	ボール運動等の授業の工夫をするとともに、縄跳び月間等の学校全体で目標をもった取組を計画的に実施する。	投げ方教室やハンドボール、Tボール等、体力テストの課題を踏まえた工夫を行った。縄跳びやマラソン週間等を２～３週間設定し、カードの活用等、目標をもった取組を実施した。	A	
②	体力テストの意識調査で「運動が好き」「体育が楽しい」と回答する児童を90%以上とする。	体力テストの意識調査「体育の授業は楽しいと思いますか」の肯定的回答が95%であった。	A	体力テストの意識調査では「体育が楽しい」が95%と高い結果であった。今後も「運動が好き、楽しい」と感じる児童を90%以上とすることを目標に、体育部を中心に教材・教具の整備や指導資料や学習カードの改善を行い、教員間で共通理解を図る。さらに年間指導計画に基づき、iPadを活用した動きの確認や民間専門家との連携を進め、児童が考えて取り組む授業づくりを充実させたい。
	体育部を中心として教材・教具を整備するとともに、指導資料等を作成し、各学年に応じた取組の充実を図る。	教材・教具については、破損等の修理を早急に行うなど、整備をした。指導事例集や縄跳び・マラソン等の学習カードは、昨年度を基に改善し、教員間で共通理解を図った。	A	
	年間指導計画に基づき、iPadを活用し、考える体育の授業を進めるとともに、民間の専門家と連携した指導を行う。	水泳指導を中心に、民間の専門家と連携した指導を進めた。また、授業において、iPadを活用し、動きを録画再生して確認するなど、児童が考え、工夫する指導を展開した。	A	
③	ワンミニッツエクササイズの家庭での実施率を80%以上にする。	体育の授業では、準備運動等で活用するなど、継続的な取組となっている。家庭については、１月までリーフレット版であったことから、取組状況の把握には至っていない。	B	ワンミニッツエクササイズの動画版が１月末から提供されたことで、授業での活用が拡大し、児童が関心をもって取り組むようになった。引き続き、授業等で活用しながら、家庭での取組につなげていく。記録カードについては、工夫を重ねていく。
	保護者会や学校便り、学校HP等で呼びかけ、保護者に協力を促すとともに、iPadを活用した記録カードを活用する。	保護者会や学校便り等を通して、ワンミニッツエクササイズの周知及び取組を呼びかけた。iPadを活用した記録カードについては、水泳カードの電子化を含めて検討する。	B	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	・いじめ予防プログラムを活用し、適切な認知に基づき、未然防止及び早期対応を全教員が実施する。 ・スクールカウンセラーや区教育委員会と連携したいじめ防止の組織的な体制を構築する。 ・各教科や市民科での授業を中心に、日常生活や学校行事、縦割班活動、地域交流など、あらゆる場面で人権教育を推進する。

評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	学級の絆や規範意識など、学級風土に関わる「i-check」での肯定的な評価を80%以上とする。	「あなたのクラスには、助け合ったり、励まし合ったりする雰囲気がありますか」などの質問項目に対して、肯定的な回答が81%であった。	A	学級の助け合いに関する肯定的評価は81%であり、区の予防プログラムを全教員が確実に実施し、結果に基づく対応を共有することで、一人一人の良さを認める学級づくりを進めた。人権標語やポスターの作成・掲示を計画的に行い、人権週間には啓発活動を強化した。また、言葉を大切にした指導や粘り強い前向き支援を徹底し、児童アンケートでは「先生は話を聞いてくれる」が91%と高い結果となった。今後も良好な関係づくりを基盤に学級風土の向上を図る。
	区の予防プログラム等について全教員が動画を視聴し、理解を深め、良さを認める学級づくりを進める。	区の予防プログラムは確実に全教員が実施し、結果に基づいた対応を遅滞なく行った。プログラムの内容は全体でも共有し、一人一人の良さを生かす指導の徹底を図った。	A	
	教育活動全体を通して人権感覚を醸成するとともに、人権標語や人権ポスターの作成、掲示等を計画的に実施する。	人権標語や人権ポスターの作成、掲示等は、担当教員を中心に計画的に行った。市民科を中心とする年間指導の他、人権週間は特に啓発活動を行った。	A	
	「言葉」を大切にした指導を充実し、粘り強い前向き行動支援を徹底し、教員と児童の良好な関係を構築する。	児童アンケート「友達とのトラブルについて、先生は話を聞いてくれる」の肯定的回答が91%であった。	A	
②	いじめの早期発見及び校内共有による迅速な解決を図る。	アンケートや日常の観察、児童の訴えなどを受け止め、迅速にいじめ対策委員会を開催し、対応を組織的に検討した。保護者との連絡も丁寧に行い、深刻化には至らなかった。	A	いじめ問題については、アンケートや日常的な観察とともに、児童からの訴えなどを丁寧に受け止め、全教員が寄り添った対応を行った。いじめと疑われるようなケースも見逃さず、当事者から聞き取りを行い、保護者と事実を共有しながら対応を進めることができ、深刻な状況に至ることはなかった。 担任や養護教諭も、スクールカウンセラーや関係機関の担当者からの助言を受け止め、日頃の指導に生かすなど、学校全体でいじめ問題の対応が徹底されてきた。 引き続き、組織的な対応を徹底していく。
	いじめDアンケートを毎月確認し、いじめの早期発見に努め、速やかに全教職員で共有する。	毎月のアンケートを確実に実施するとともに、気になるケースは、いじめ対策委員会で確認するとともに、全体でも共有し、早期発見・早期対応につなげた。	A	
	養護教諭やSC等と連携を密にし、日常的な情報共有とともに、専門的な見方を生かした組織的な対応を行う。	養護教諭が、スクールカウンセラーと一日の始めに状況を共有し、相談体制を整えることができた。担任は、スクールカウンセラーの助言を受け止め、指導に生かしていた。	A	
	状況に応じて、区巡回相談員やHEARTS（学校支援チーム）と連携し、児童への聞き取りや支援を行う。	巡回相談員やHEARTS、区のいじめ対策室等の外部機関と対応状況について連絡を取りあい、方向性を共有しながら進めることができた。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目５　特色ある教育活動に関すること（多様性を尊重する態度の育成）

重点目標	・児童一人一人の個性を大切にし、褒めて伸ばす指導を充実し、自己肯定感を高める。 ・「交流及び共同学習」を全学年で実施し、共に学ぶ機会を設定する。 ・デフリンピック開催を踏まえ、手話を中心に体験的な学習を拡充し、障害者理解を推進する。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	児童の自己肯定感に関し、「i-Check」での肯定的な回答を70%以上とする。	「自慢できる得意なことがありますか」、「自分のいいところを言えますか」、「自分にはいいところがあると思いますか」という質問項目に対して、肯定的な回答が71%であった。	B	自己肯定感に関する肯定的評価は71%であり、授業や行事で役割や目的を明確にし、成功体験を得られる場を工夫した。UDLの視点から学び方を選択する活動を進め、自分で決めて取り組む経験を積ませた。縦割班活動では上級生が下級生の模範となる場を設定し、関係性を科づける指導を行った。今後も多様な活躍の場を広げ、自己肯定感のさらなる向上を図る。
	授業や行事等において、より多くの成功体験を味わえるよう、児童一人一人の活躍の場を工夫する。	学校行事において、自身の役割や目的を明確にした活動を、全学年で実施した。授業では、UDLの考え方を生かし、学び方の選択等、自身で決めて取り組む活動を推進した。	A	
	縦割班活動において、上級生は下級生との関係性を価値付け、下級生は上級生を模範とする指導を徹底する。	高学年としての立場を意識できるようにして、活動毎に価値付けを行った。また、運動会における縦割班競技を新設し、上級生が下級生の模範となる機会を設定できた。	A	
②	さくら学級と通常の学級との「交流及び共同学習」を、行事以外の取組に拡充する。	さくら学級児童の状態に応じて、音楽と図工の授業に参加している。	A	開設2年目として、全ての行事は共同で行うことを基本として実施し、児童や保護者、教員の意識も定着した。通常の学級の担任から、さくら学級の児童に参加を促す声掛けなども見られた。図工の授業は、全学年が共同で実施したことで、互いの児童の日常的に交流する意識を高めることができた。 縦割班清掃は、さくら学級も清掃場所として分担するなど、一層、通常の学級の児童が関わりやすい環境を整えることができた。
	各教室にさくら学級在籍児童用の机を常設するとともに、１教科で継続的に共に学ぶ機会を設定する。	各学年の１組にさくら学級の児童用の机・椅子を配置した。行事の事前学習等では、実際に、さくら学級の児童が、通常の学級に合流して指導を受ける機会も計画的に設けた。	A	
	全学級に対して、年度当初に説明する機会を設定するとともに、全ての行事や校外学習において、共同で実施する。	１学期に、さくら学級担任が全ての通常の学級において、朝の時間を活用して、在籍児童等について、紹介する機会を設けた。また、基本、全ての行事を共同で実施した。	A	
③	児童・生徒アンケートにおいて、多様性に関わる肯定的な回答を85%以上とする。	児童アンケート「聴覚障害のある人に対して相手の気持ちを考えて自分から話しかけようと思う」の肯定的回答が75%であった。	B	デフリンピックを踏まえ、全学年で交流学習や手話学習を計画的に実施した。４～６年生ではデフアスリートによる講演・体験を行い、聴覚障害への理解を深めた。今後も体験的な学習を重ね、多様性への意識を高めていく。
	デフリンピック開催を踏まえ、全学年で交流学習や手話を学ぶ場を2回以上設定し、体験を中心とした活動を計画的に実施する。	デフアスリートとの体験として、４、５、６学年で陸上・ブラインドサッカーの選手による講演・体験を実施した。また、聴覚障害者協会の協力を得て、全学年で手話教室を実施した。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立宮前小学校

評価項目６　特色ある教育活動に関すること（キャリア教育）

重点目標	・学級や学校の一員としての所属意識を高め、積極的に関わる態度を育成する。 ・市民科「一貫プラン」を軸に、商店街や地域の方々との交流を充実するとともに、ドリームジョブ等の学習活動を通して、働くことや自分の将来の夢への意識を高める。 ・模擬選挙やスチューデントシティに取り組み、社会の自治への理解を進めるとともに、地域の一員であることの自覚を深める。

評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	係・学級・所属する集団への積極的な行動力に関する「i-Check」での肯定的な評価を75%以上とする。	「クラスでは、みんなが当番や係の仕事をきちんとやっていますか」などの質問項目に対して、肯定的な回答が88%であった。	A	当番や係の仕事に関する肯定的評価は88%と高く、縦割班活動では高学年が企画し下級生を支える場を設け、集団への主体的な関りを促した。地域清掃では目的を共有し、意識して行動できるよう全体で共通理解を図った。さらに、コミュニティスクールデイでは6年生の提案を市民科として位置付け、運動会の縦割班競技新設につなげた。今後も児童の主体的な参画を促す機会を充実させる。
	児童が他者や集団のために働き、成功体験を味わい、勤労奉仕の意識を高められる場を全学年で設定する。	縦割班活動では、高学年が企画を考え、下級生の活動を支える機会を設定した。また、地域清掃等では、目的を明確に伝え、意識して活動できるよう全体で共通理解して進めた。	A	
	コミュニティスクールデイ等、児童の提案を受け、学校行事や学校運営を改善する機会を年１回以上設定する。	６年生が提案することについて、市民科の授業の一環として位置付けることができた。６年生の提案を受け、運動会において、縦割班競技を新設した。	A	
②	将来の仕事や目標への興味・関心に関する「i-Check」での肯定的な評価を75%以上とする。	「将来、あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事につきたいという夢や目標がありますか」という質問項目に対して、肯定的な回答が85%であった。	A	将来の仕事や目標への肯定的評価は85%と高く、市民科では体験・交流活動に探究的な学習を取り入れ、課題意識をもって自分の将来を考える機会を設けた。３年生以上では「一貫プラン」に基づき、地域・福祉・職業・生活の領域で他教科と関連した探究単元を展開した。さらに、大学・企業・地域との連携による交流学習や模擬選挙、職業体験を積極的に実施した。キャリア・パスポートも年間５回以上活用し、成長を振り返りながら将来の在り方を考える学習を充実させた。
	市民科において、体験活動や交流活動等に「探究」を取り入れ、課題意識をもって自分の将来や生き方を考える機会を設ける。	３年生以上の学年において、「一貫プラン」のテーマに基づいて「地域」「福祉」「職業」「生活」の領域で、他教科と関連させながら、探究的な学習を取り入れた単元を展開した。	B	
	近隣大学や地域との連携による模擬選挙や職場体験、民間との連携を通した職業に関する授業等の拡充を図る。	「浜松市立奥山小学校との交流学習」や「アスリートとの交流」、「職業体験・ドリームジョブ」、「SDGs」「模擬選挙」等、地域や企業、大学と連携した授業を積極的に実施した。	A	
	「キャリア・パスポート」の活用を年間5回設定し、自己の変容を確認しながら、将来の在り方・生き方を考える活動を行う。	市民科授業や学校行事等について、計画的に「キャリア・パスポート」を活用し、活動を振り返りながら自身の成長を確認する活動を、年間5回以上全学年で行った。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成